

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行
(財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



久保山愛吉記念碑を前に「座り込みと俳句輪読」

この炎天血迷いか中・仏核実験
愛吉の夢あゝ非核の空が遠退く
核許すな地の裏側へ泡立つ海
座り込むわれら俳人愛吉忌
「一句自浄」八月のブラウスは白
新世紀へ非核を繋げ今年蝉
福竜丸の鼓動が見えます緋の夾竹桃
核の海へ白さるすべり高くNON
反核署名部活の子等の陽焼けき手
とろとろとタヒチの天へ目玉焼
マラソン少年いわし雲曳き久保山忌
すべてゼロ指し被爆無線機の九月
ムルロアの秋けもの等の核実験
りんどうの息を久保山忌の碑文
車座にぶどう艶やか被爆前
島々発光愛吉の海また汚染
青い海へ翔べ鳩反核の芭蕉たち
死の灰と消えずムルロアへ愛吉忌
花のない季を愛吉碑秋彼岸
死の灰は夢だつたと揺り起こしてくれ船よ
反核署名庭はひまわり一直線
被爆三月風を狂わす砂嘴岬
青い魚の蜜月終わるムルロア環礁
帰る燕ヒロシマの声伝えてよ
非核九月フランスパンの焦げし頬も
万の瞳を見て月白の被爆船
久保山忌ケモノ貌してムルロア沖
ムルロアに核また残暑へ濁く舌
愛吉碑バツタ構えて忌を修す
地球忌へ二分前の手握りひらく
秋蝶舞う核のない星捜す仕草
遠花火次のページは久保山忌

あきら
いさお
花猿
吟石
桂子
恵子
紅鳥
貞夫
幸男
志青
せつ子
たけし
たもつ
千恵子
撞音
つねお
俊夫
白樹
晴美
ひろし
洋
真樹
まり子
美沙夫
道夫
夕霞
よし江
義彦



愛と平和の歌の朗唱も——平和を語る第五福竜丸の集い

核実験抗議、核兵器の廃絶を——中
いまこそ核兵器の廃絶を——中
国・フランスの核実験に抗議する
運動の高まりなかで、四十一年目
の久保山愛吉氏の命日である九月
二十三日、展示館の内外で多彩な
催しが行なわれました。
十五回目になる久保山忌句会
今年も新趣向。核実験に抗議する
俳句人の意志を鮮明にしたいと、
「座り込みと俳句輪読」を計画、
久保山愛吉記念碑の前に円座を組
んで三十分座り込み、それぞれが
自作の俳句を色紙や短冊に書き、
一人ずつたちあがって朗読発表し



東京原水協の第五福竜丸のつどい

核実験抗議、核兵器の廃絶を——九・二三多彩な行動
ました。記念碑の横には高さ二メー
トル余、長さ七メートル余の水色
のベニヤのパネルが屏風状に立て
られ、詠まれた俳句はテープで横
断幕の上部に貼られ展示されまし
た(一面写真)。午前十時からの
座り込みには新俳句人連盟の人の
とを中心に三十余名が参加、全部
で六十二句が発表されました。そ

「船は何を語っているか」
九月になって、山形・宮城・長
野・滋賀・三重・和歌山県などか
ら次々に修学旅行の中学生が訪れ
ました。九月二十一日、来館した
滋賀県の安曇川中学校は「みんな

の一句——
座り込むわれら俳人愛吉碑 吟石。
記念碑にりんどうの花を一輪づ
つ献花したあと、江東区文化セン
ターに移動して本来の句会を続行
し、今年も森白樹さんの句が「特
別船員賞」を得ました。
碑文一語一語の水輪九月湾
船と共に平和を語る
平和を語る第五福竜丸の集いは
四回目。午前、午後の部二回にお
たりそれぞれ二時間近く、船首左
舷下の特別舞台で、絵本読み聞か
せ、語り、紙芝居、朗読、口演童
話などが演じられました。今年も
バイオリン伴奏による雨宮すみえ
さんの朗唱、ギターなどの伴奏に
よる相川マチさんの愛と平和の歌
の朗唱もあり、出演者総数十五名
と多彩。おりから来館した新日本
婦人の会葛飾支部の婦人たちが港
区「歩く会」の人々も熱心に聞
き入りました。
また、高橋伸樹さんの「似顔絵

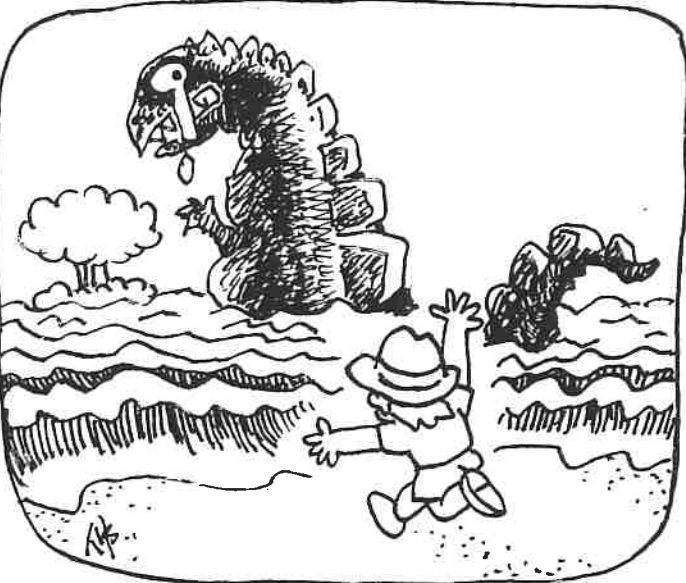
コーナー」も設けられ好評を博し
ました。
第五福竜丸の集いや学習会
午前十時半から展示館前広場で
は百五十人をこえる参加者によっ
て、東京原水協、江東区原水協主
催の「一九九五年九・二三第五福
竜丸の集い」が開かれました。タ
ヒチでのフランス核実験抗議の国
際集会に参加した神奈川県原水協
の永沢丈夫事務局長が生々しい報
告をし、フォークシンガールの橋本
のおよさんの歌声に全員が唱和し、
核実験強行へのいかりを新たに
しました。
午後からは
船尾船腹下で、
平和と軍縮を
めざす全国連
絡会が、第五
福竜丸乗組員
大石又七氏を
囲んで学習会
を開きました。



大石又七氏を囲んで学習会

で創ろう東京シンフォニー」を合
言葉に、二泊三日の日程第二日目
が都内三十箇所を七、八名のグルー
プで訪問する「自主研修」。国会
で「県出身議員の一日の行動は」、
せんべい屋さんで「草加せんべい
の流通ルートは」、柴又帝釈天で

「寅さんのふるさと」の住民の声は」
などユニークな訪問先とテーマと
共に展示館訪問も設定。女生徒の
班長さんはじめ七名が「つぎつぎに
難しい質問を浴びせました。その
テーマ「第五福竜丸はいまわれ
れに何を語っているか」。



今年の夏、54年作品の『ゴジラ』と、95年作品の『ガメラ』を見た。第一作の『ゴジラ』が封切られた時は、福島県の山の中の高校

三年生で、小遣いが無く見逃した。その後、『ゴジラ対キングコング』『ゴジラ対スペースゴジラ』など何本かのゴジラ映画は見たが、ついに54年作品の『ゴジラ』(もう一本『ゴジラ』の映画があるが、これも見そこなった)は見ることが無く40年もたつてしまった。見たい。見たい。思っていた時、下高井戸の映画館の夏休み映画会の夜の部で、ゴジラ大会がある事を知り、その中に、54年『ゴジラ』と、95年『ガメラ』(『ガメラ』

の映画ももう一本あり、これは見たような気がする)があるのを知り、喜んで出かけた。『ゴジラ』は、モノクロ、スタンダード版なので、古いかんと思っ て見たが、新しくなった。南海の漁船遭難のシーンから始まる『ゴジラ』は、核実験のため海底から甦えり、放射能のため突然変異をきたし狂暴化した巨大怪獣ゴジラを主人公にした物語だ。ゴジラは科学者の研究で白骨と化して海底に沈む。ラストシーンで、古生物学者の役の志村喬が、「核実験を止めないかぎりには、第二、第三のゴジラが現れるであろう?」と、いう意味のセリフを言う。ゴジラは、反核映画だったのか? 新しいはずだ。しかし、その後のゴジラはアイドル化した。年表をみると――。54年3月1日。第五福竜丸、アメリカの水爆実験の『死の灰』を浴びる。3月14日。第五福竜丸、焼津港に帰る。3月16日。日本国民、第五福竜丸事件を知り、パニックとなる。3月28日。久保山愛吉さんほか第五福竜丸乗組員23人、国立東京

『ゴジラ・カム・バック!!』

高橋 伸 樹

「恐るべき兵器を作り出してしまった」罪悪感と、将来起こりうる結果に対する不安に押し潰されてしまった」と自伝「註」の中で語っている。そして現実には広島・長崎の破壊を知ったとき、「その罪悪感さらさら激しくなった」と告白している。彼は戦後X線天文学や宇宙科学のパイオニアとして活躍するが、原爆開発に関わった経験は生涯、心を痛めるトゲとなったようだ。同じく戦時中ロスアラモス研究所に「微用」され、サイクロトロンの仕事などを担当したR・ウィルソン博士も、尊敬する所長オッペンハイマー博士の下で任務を忠実に果たすとともに、山奥の科学者村Vでの刺激に満ちた生活を妻と存分に満喫したらしい。しかし科学者たちの(核爆弾は持つだけという)意図に反して広島と長崎への投下が行われたことを知ったとき、彼は「黙り込み、

食欲を失い、ついには吐き気まで催すようになった」とテレビのインタビューで語っている。後にイリノイ州のフェルミ国立加速器研究所の所長まで勤めた彼も、長い間罪悪感に悩まされた一人であった。広島への攻撃に打ちのめされ、最も思い切った変身をしたのは、テネシー州オークリッジ国立研究所で原爆開発に携わったウィリアム・ポラード博士であろう。かねて深い信仰の持ち主だった彼は、原爆による大量殺傷についての罪の意識と悔恨に苛(さいな)まれた結果、ついに研究を放棄して米国聖公会の聖職者となった。そして信者に教会で平和を説く一方、広島・長崎の罪滅ぼしとして、核エネルギーの平和利用の基礎研究に役立つ低出力の研究用原子炉を、アジアの一国、できれば日本に贈ろう、という運動を一九五七年頃から信者に呼び掛け、結局日本本の立教大学に二〇〇キロワットのトリガII研究炉が寄贈された。博士は先年亡くなったが、この炉はわが国最初の大学研究炉の一つとして注目され、今日なお全国の研究者によって広く活用されている。しかし原爆に関わった多くの科

学者は、こうした個人的な罪悪感や自責の意識、善意の贖罪活動に留まらず、科学者全体としての社会的責任の重大さを痛感し、それを果たすために英米を中心に科学者運動の組織化を進めた。これらの科学者の活動の背景には、ナチス・ドイツの原爆に対抗しようとして献身した原爆開発の成果が、結局は予想外の政治目的に利用されて広島・長崎の悲劇を引き、ソ連との核軍備競争に途を開く結果となったことへの深い反省がある。とくに長い歴史を持つ団体としては、一九四五年に結成された米科学者連盟(FAS)があり、現在も核戦争の脅威を除くため活発な活動を続けている。もっとも中にはテラー博士のように、水爆開発など、冷戦下の軍備増強を主導したり、大統領科学顧問として核政策決定に深く関与した科学者も少なくない。【註】ロッシの自伝(英文)は博士と親しい日本の宇宙線研究者小田稔博士の和訳が中公新書に収められている。書名は「物理学者ブルーノ・ロッシ自伝」。内容はかなり専門的で、一般読者には少々難解だが、非常に興味深い。(立教大学名誉教授、本協会理事)

「一年前のほとんどの新聞の映画評は『ガメラ』はゴジラを食った」と書いた。そのためか東宝は「次回でゴジラは終了」と宣言した。するとすぐフランスが、ムルロア環礁で核実験を強行し、その空気を狙って中国も核実験を行って、世界中に反核の輪がひろがった。私は、名作『シェーン』のラストシーンの少年のように叫びたい。『ゴジラ・カム・バック!!』。(漫画家)

核兵器と科学者

原爆開発の興奮と痛恨 (9)

――「投下」報道の衝撃とその反応(続き)――

小川 岩 雄

連載 10

広島、続いて長崎への原爆投下を知って強い衝撃を受けた米国の科学者は、アインシュタインとシラードだけではなかった。ここでは当時中堅、またはまだ助手とか大学院生程度の若手研究者だった数千人の開発参加者のうちの何人かについて、「ヒロシマ」以後の心理的打撃や悔恨、新たな社会的行動や進路の選択などを追って見たい。

イタリアから米国に亡命していた著名な宇宙線研究者ブルーノ・ロッシ博士は、ニューメキシコ州のロスアラモス国立研究所でブルトニウム原爆の起爆法の開発を情熱的に遂行し、原爆の完成に大いに貢献した。だが一九四五年七月、史上最初の原爆実験トリニティ・テストがアラモゴルドの平原でついに成功して間もなく、研究所に帰る車の中で、それまで自分たちの功績に誇りを感じていた彼が突然、

「恐るべき兵器を作り出してしまった」罪悪感と、将来起こりうる結果に対する不安に押し潰されてしまった」と自伝「註」の中で語っている。そして現実には広島・長崎の破壊を知ったとき、「その罪悪感さらさら激しくなった」と告白している。彼は戦後X線天文学や宇宙科学のパイオニアとして活躍するが、原爆開発に関わった経験は生涯、心を痛めるトゲとなったようだ。同じく戦時中ロスアラモス研究所に「微用」され、サイクロトロンの仕事などを担当したR・ウィルソン博士も、尊敬する所長オッペンハイマー博士の下で任務を忠実に果たすとともに、山奥の科学者村Vでの刺激に満ちた生活を妻と存分に満喫したらしい。しかし科学者たちの(核爆弾は持つだけという)意図に反して広島と長崎への投下が行われたことを知ったとき、彼は「黙り込み、